

事業概要書

事業名	被災者への生活支援と二次避難所から自宅への送迎支援事業				
開始日	2024年4月15日	終了日	2024年7月31日	日数	108日
団体名	一般社団法人 BIG UP 石巻				
(カウンターパート)	BIG UP 大阪、GAIA 復興支援プロジェクト				
担当者名	阿部由紀	スタッフ人数	2人		

事業費総額 (税込)	310.6 万円
CF 事業枠	300 万円
その他資金	61.3 万円

事業目的	<p>避難所や在宅避難者の生活を、シャワーと洗濯ブースなどの提供・運営等を通じて被災生活の暮らしを向上させ また、二次避難所から自宅への送迎サポートにより、一日も早い生活再建を目指す</p>
事業全体の概要	<p>○BIG UP 石巻とは 東日本大震災の際、石巻に集まった個人ボランティアを取りまとめ、災害支援チーム「アモール石巻」を設立し、釜・大街道地区の復旧支援を担った。 2012年4月、「BIG UP 石巻」に名称を変更 釜・大街道地区に腰を据え、地域力の向上を目指し、長期的に被災者を見守り、在宅被災者への支援や子ども支援活動などを通じて地域の活性化に取り組んだ。 2012年10月に一般社団法人の法人格を取得。 一方、東日本大震災がきっかけで生まれた団体であるため、全国に散らばるスタートアップメンバーと共に災害支援活動を展開。熊本地震、大阪北部地震などの災害に従事。石巻でも被害のあった2019年の台風19号の際は石巻市民を巻き込みながら支援活動にも取り組んだ経緯もある。 2022年12月には代表理事を地元出身で震災当時の石巻災害ボランティアセンターの中心人物ある阿部由紀（元社会福祉協議会）に引継ぎ、東日本大震災の際の災害ボランティアセンターでの経験を基に「自助、共助、公助について」防災講演会を日本各地で実施。近年、災害支援団体としての色がより濃くなっている。 昨年5月の能登半島地震の際にも長期的に珠洲市の支援にあたっていたことから、珠洲市社会福祉協議会と連携し1月2日に阿部が現地入り。災害支援を行う他団体との連携や、社会福祉協議会との調整、ささえあいセンターへの助言を行うとともに、炊き出しを行う団体のバックアップ、在宅避難者や避難所への物資配布、姉妹団体である BIG UP 大阪と連携した移動式シャワー支援のサポートなど、現地ニーズに迅速に対応し支援にあたっている。</p> <p>○BIG UP 大阪とは 東日本大震災の支援において、活動をともにスタートアップメンバーである松本（BIG UP 石巻 理事）が、大阪北部地震を機に関西圏での災害支援南海トラフ地震に備え立ち上げた団体。現在も BIG UP 石巻と連携し、支援活動を展開している。</p> <p>○GAIA 復興支援プロジェクトとは 珠洲市三崎地区に深く関わる岡島夫妻が立ち上げた団体。岡島夫妻は現在加賀に二次避難をしている二次避難者の支援を行うとともに、金沢や珠洲でのネットワークを生かして、三崎地区の住民の二次避難のコーディネートや、現地に残る住民の支援を行うなかで、BIG UP と連携を開始。今後地元団体が支援の担い手となれるように、協働を行いながらノウハウを提供。支援体制の出口戦略として石川県の地元団体の活動が継続して行</p>

えるようサポートしていく予定。

○取り組むべき課題

2024年能登半島地震では、能登半島全域で家屋の倒壊や津波被害が発生し、大きな被害が出た。多くの住民が被災し、公設避難所のほか数多くの民間避難所が開設。仮設住宅の整備、みなし仮設などの入居により、徐々に避難所の入所人数の減少、避難所の集約などで、暮らしのフェーズは次に移りはじめているが、水道などのインフラの復旧は徐々に進んでいると報道されているが、水は出ても、宅内漏水や浄化槽の損傷など排水の問題がクリアにならず、自宅で水が使える家庭は数パーセント程度というのが実情である。そのため、炊事、洗濯、入浴などがままならず、現地での生活状況は依然厳しい状態にあり、炊き出しや洗濯・お風呂の支援ニーズは高い。

発災から三か月たった今も能登半島の被災現場では数多くの被災家屋が残り、街の風景に大きな変化は見られない。

これまでの災害現場と違い、街でボランティアを見かけることも少なく、その一因として被災地域へのアクセスのしづらさがある。県が指揮を取り各地市町の災害ボランティアセンターへボランティア派遣を実施していたが、住民からのニーズに対応する速度は鈍化している。理由としては、交通渋滞やボランティアの宿泊場所確保の課題などの他に、依頼者が二次避難先に滞在しており、自宅までの移動が困難な為に作業に立ち会える事が出来ない事も大きな要因となっている。

また、仮設住宅の着工、入居も進んでいるものの、避難所の解消は数ヶ月かかるため、避難所への支援をいかに継続するかも課題であり、建物調査で危険と判定された建物で避難生活を送る住民などもいるため、避難所等への支援とともに在宅被災者への支援も必要とされている。

一方で、二次避難先の宿泊施設では観光業としての繁忙期を迎え、三次避難を検討しなければならない避難者も少なくない。みなし仮設住宅制度を利用してしまうと、仮設住宅に応募する権利も消失してしまうため、1月に退去した一次避難先の避難所へ戻る選択肢しかない方も出てきている。また、二次避難者の中にも、被災家屋の片づけを行いたい、様子は見に行きたいといったニーズがあるものの、戻る足や戻った先での滞在、片づけ等の人手の調整などが足枷となり、被災した地域へもアクセスが困難となっている。

こうした状況下で、避難所・仮設住宅や在宅避難者など、現地で暮らす人の生活支援を力強く行い暮らしを支えながら、目に見える形で街の風景が前に進んでいるといった将来の復興へ希望の持てる、具体的なビジョンを描けるような支援の在り方が必要とされている。

○パートナー事業で行なう事業・活動

コンポーネント①：一人も取りこぼさない生活支援

・姉妹団体のBIG UP 大阪と連携した、シャワーブースの設置運営や洗濯ブース設置運営を行う。

シャワーブースは5箇所あり、9:00～21:00の間で稼働。一人30分の利用で、最大で一日100～130名程度受け入れが可能。

・支援対象者として、避難所などで生活している方で、公衆浴場での入力が難しい方や公衆浴場に入れない方、他人と入浴することができない事情がある方もおり、各家庭の水道復旧と排水の問題がクリアになるまでは、必要とされることが予想されている。

・洗濯ブースは4台を設置し、夜間は需要が低いため、9:00～15:00で稼働。一台あたり45分～60分かかるため、予約などで時間調整をしいつ。シャワーは最初の一台を設置した2月13日からこれまでで延べ約4,200人、洗濯は3月5日からこれまで延べ約1,000人が利用。

・現在、JAグリーンセンター珠洲の裏手にブースを設置し、飯田地区を中心に支援を展開しているが、ニーズが高い正院地区の公民館敷地内にも設置をする方向で調整中。

(教育委員会とは協議済)

・発災後 1 ヶ月はプッシュ型支援による物資の配布が行われ、現在はプル型支援に移行している。また市内のドラッグストアやコンビニも開き始めていることもあり、いたずらな物資の支援は民業圧迫の観点から行うべきではない。一方で、それでも買えない状況にある人や、現地で生活する中で手に入らないものなど、かゆいところに手が届く物資の支援は継続して必要である。BIG UP では、発災当初から金沢の企業から倉庫をお借りして物資の配送、配布を行ってきたが、そのネットワークや配送ノウハウを他の活動のなかで得たニーズをもとに、リクエストに応じた物資の調達、配布を現地団体 GAIA 復興プロジェクトと連携し対応する。

コンポーネント②：二次避難マッチング支援事業

これまで、物資の配送などにつながった二次避難者のコミュニティや、ボランティアセンターや NPO との連携し、週に 2 回～3 回程のペースで、避難者に対し自宅等でのボランティア作業立会目的で二次避難先から作業現場への送迎支援と、ボランティアニーズのマッチングを同時に実施する。

移動と作業にかかる時間を合わせると長時間を要するため、日帰り or 宿泊については避難者の体力やスケジュール、そして運転手の移動中の安全性を見極めながら調整を行う。

宿泊が必要となった際などは、姉妹団体と連携して運営しているシャワーブースの活用や、能登町には連携団体が管理している宿泊施設があり、そちらを利用していただいたり、正院公民館に設置予定のプレハブを活用するなど、必要に応じた調整を行う。

また、依頼主などの家屋の映像や暮らしの思い出のインタビューなどを記録し、被災から再建までの記録、取っておきたい思い出を、家が解体された後でも見られるようにアーカイブし、提供する。また本人の承諾があったものは随時公開していく。

二次避難者からのニーズの吸上げについては、前述した GAIA 復興プロジェクトと連携し二次避難者のコミュニティと密に連携することで、直接アプローチがしにくい見えざる被災者へも波及させていく。

〈期待される効果〉

コンポーネント①では現地で生活を続ける被災者の生活を支援することで、インフラが復旧するまでの暮らしを支え、ここで暮らし続けようという希望の芽を繋いでいく。

コンポーネント②では、避難者が地元にもどるきっかけづくりや、作業現場に立ち会えることで、暮らしの再建に希望がもてる。また、ボランティアセンターの抱えている対応すべきニーズ件数の削減 や作業現場が増えることで一般ボランティアの受け入れ数の増加につながり、街の景色が少しずつ変化することで、相乗効果で街全体の雰囲気明るくなるのが期待される。

2 つのコンポーネントを通じて、被災者一人ひとりの心情や状況に合わせてながら、まずは、避難者がしっかりと生活を送れる状態になるということを目指す。その上で、一人でも多くの被災者が我慢せず希望する形での「暮らし」再建を実現するため、一人ひとりの声を記録し、発信していくことで、将来をあきらめかけている二次避難者や、いままも珠洲に暮らす住民が希望を言いだせる空気感の醸成につながっていく。

事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)	裨益者 (誰が、何人)
<p>コンポーネント①：一人も取りこぼさない生活支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・姉妹団体と連携したシャワーブース運営や、生活支援。生活支援を行う団体の側面支援、後方支援 ・ニーズに応じた、タイムリーでかゆいところに手が届く物資の調達、配布 	<ul style="list-style-type: none"> ・珠洲市の被災者
<p>コンポーネント②：2次避難マッチング支援事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二次避難先、みなし仮設等からの自宅への送迎とボランティアマッチング ・被災住民のニーズ調査とボランティアマッチング ・被災者の生活再建の様子を記録。本人への提供、WEB 等での公開 	<ul style="list-style-type: none"> ・二次避難中の被災者 ・能登半島をはなれ、みなし仮設等で暮らす被災者。